特定非営利活動法人
宮入
慶之助
記念館

宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2024（令和６）年　８月１日発行
第34号

日本住血吸虫中間宿主貝の和名誕生を探る

山口　明

1. アプローチの視点

1）漢字表記の「宮入貝・片山貝」という和名は、いつごろから使われだしたのか。
2）漢字表記の和名と片仮名表記の和名は、時代的にどのように移り変わってきたのか。
3）「宮入貝」と「片山貝」の和名には使い分けがあるのか。
4）宮入慶之助は中間宿主貝のことをなんと呼んでいたのか。

上記の視点から和名誕生を探るためにまず可能な限りの文献にあたり、用語検索機能を使用して、学術論文等からの和名の抽出を行い、年代を網羅する形で主要なものを抽出して年代的に整理した（別紙：宮入貝／ミヤイリガイ　片山貝／カタヤマガイの和名の年代的整理表参照）。
（文献検索では、国立国会図書館デジタルコレクション・Cinii　Reserch・Google　Scholar・J-STAGE・Semantic Scholar・JDreamⅢのオンラインプラットホームを使用した。）

2. 和名誕生

1）日本住血吸虫中間宿主貝発見段階（大正 2 年～４年）

大正2年8月に宮入慶之助と鈴木稔は、日本住血吸虫中間宿主貝を発見するが、この発見報告論文（「日本住血吸虫ノ発育ニ関スル追加」『東京医事新誌』1836）では、中間宿主貝のことを「一種の蝸牛」と称している。また、大正3年には鈴木は前年の報告論文を踏まえて新たに「特殊蝸牛」（「日本住血吸虫中間宿主ノ動物学上ノ所属（学会）」『福岡医科大学雑誌』7（5））、宮入は水棲蝸牛（「日本住血吸虫のツェルカリア」『医事新聞』895ほか）と称している。

宮入は、大正4年の九州医科大学講演会で、「この中間宿主は、小さく細長き巻貝でありまして、この方面の専門家岩川理学士により学名『ヒドヒビス』とつけられたそうに承知して居りますが、まだ肝腎な日本名をば、授けられないようであります。」と言っている。

2）和名誕生－片山貝－

大正5年1月10日開催の福井県今立郡医師研究会にて古川田溝が「片山病の原因たる日本住血吸虫の中間宿主たる片山貝石標本供覧」を行っている（『医海時報』1126）。この段階において「片山貝」という名称が早くも使われているのを確認できる。

また、大正5年には「宮入氏巻貝」という語句が土屋岩保により使用されている（「日本住血吸虫病ノ療法ニ就テ」『日本消火機病学会』15（2））。

3）和名誕生－宮入貝－

大正6年4月15日山梨日日新聞の「宮入貝の山を築く　宮入博士の視察」という記事に「宮入貝」の名が初めて使われているのを確認できる。これは宮入博士の視察行動に対して敬意を表して中間宿主貝に早くも宮入の名を冠して「宮入貝」と呼んだのではないかと思われる。山梨県では地方病研究部が同年5月に発行した『俺は地方病博士だ』においても「宮入貝」と使われている。本文の説明では「宮入博士に発見されてから、この貝を『宮入貝』と言う」と記している。山梨県での一連の経緯の中で、「宮入貝」の和名が誕生したことが確認できる。

また、寄生虫学者宮島幹之助（1872～1944）は、『日本農業雑誌』（13(8)7月号 大正6年）に「特別なる貝即ち私は特に宮入貝（みやいりがい）と呼んで居るが…」と記している。

これらの山梨県での「宮入貝」の使用や宮島の発言は、その後の「宮入貝」が広く和名呼称として使われ

ることに少なからず影響を与えたのではないかと思われる。

3. 宮入慶之助の和名対応

大正6年以降の学術論文では「宮入貝」という和名が広く使用されるようになるが、発見者である宮入自身は「宮入貝」という和名にどのように対応したのだろうか。

医学界で「宮入貝」と広く呼ばれる前には、宮入は「一種の蝸牛」、「河貝子科」、「水棲蝸牛」、「蝸牛」などと中間宿主貝を呼んでいた。大正8年3月7日・8日の内務省衛生局主催「公衆衛生講習会」での講演では、宮入は「巻貝」と使い、大正10年「寄生虫病および地方病予防　(7）～（11）住血吸虫」（『日本医事週報』（1372～1390））においても同じく「巻貝」と使っている。医学界では「宮入貝」という和名が広く使われているにも関わらず、宮入自身では自分の名を冠した「宮入貝」という和名を全く使っていないことが注目される。

小林照幸氏は、「学界では、名称決定にあたって当然のように発見者の宮入にちなみ『ミヤイリガイ（宮入貝）』と決めた。宮入は至極恐縮して、『片山記』に敬意を表してカタヤマガイ（片山貝）とよんではどうかと、提案、ミヤイリガイ、カタヤマガイのどちらの名称でも登録されることになった。」（『死の貝　日本住血吸虫症との闘い』新潮文庫2024年）と記しているが、宮入は「宮入貝」とも「片山貝」とも自身では使っておらず、ただ単に「巻貝」とだけ呼んでいる。小林氏が言うように宮入は自分の名を冠した和名呼称は恐縮して使わなかったということであろうか。

4. 宮入貝の地方名の発見

文献資料探索の過程において、宮入貝の地方名（方言）の存在を確認した。『福島県大沼郡誌』の「方言訛語 ひ之部」（大正12年）に「びな」（宮入貝のこと）と記されている。福島県には日本住血吸虫症の発症は確認されておらず、従って宮入貝の存在もこれまでのところ確認されていない。

柳田国男も「蝸牛考」（『人類学雑誌』42（7）昭和2年）、『蝸牛考』（刀江書院　昭和5年）で、「会津の大沼郡の方言集には、ビナとは宮入貝のことだと謂って居るが、是も亦同じ川蜷である。」と大沼郡誌の記述を引用し、「ビナ」のことを説明している。

大沼郡は福島県西部で新潟県に接するところに位置する。これまで知られている有病地とははるかに離れたところでの宮入貝の地方名の存在は、どのようにとらえたらいいのだろうか。

5. 大正6年以降の和名

「宮入貝」と「片山貝」は、ともに漢字表記で両者とも広く使用されている。大正9年の朝鮮人の寄生虫の知見において、「ミヤイリガイ」と片仮名表記の事例が見られる（「朝鮮人の腸寄生虫卵の異型　二各種寄生虫の分布に就ての私見　十一日本住血吸虫」小林晴治郎）。また宮入貝のことを九州福岡県等では「蛍貝」（『福岡県の気候と風土』大正12年）と言っているところがあるが、これは大正6年に宮島幹之助が「恐ろしい病気の仲介たる宮入貝を蛍の幼虫が喰うことを発見した」（「蛍を捕るな」『日本農業雑誌』13（8)）ことに由来して「蛍貝」と呼ばれたようである。

6. 昭和初期段階の和名

漢字表記の「宮入貝」が多用されるが、昭和２年の『日本動物図鑑［分冊］』（北隆館）では、片仮名表記の「ミヤイリガイ・カタヤマガイ」が併記使用されている。この段階においての片仮名表記は、ごく少数の事例である。岡山県下では漢字表記の「片山貝」の使用が昭和3年・6年・11年に確認される。岡山県では、「宮入貝」ではなく、「片山貝」の和名が広く使用されていることがわかる。また動物学（『動物系統解剖学』昭和3年、『有用有害鑑賞水産動植物図説』昭和8年）、貝類学（『広島県産貝類目録』昭和13年、「雑録　中支の貝類採集」『ヴヰナス』10（2）昭和15年）の論文においては漢字表記の「片山貝」及び片仮名表記の「カタヤマガイ」の使用が見られる。

この段階では、漢字表記の「宮入貝」が通用され、漢字表記の「片山貝」とともに片仮名表記の「カタヤマガイ」が見られる。

7. 昭和20年代以降の和名

昭和20年から22年に関しては、関係文献を探索したが、戦後まもなくということなのか文献は見出しえなかった。昭和27年には、片仮名表記の「ミヤイリガイ」の和名が見られる（「ミヤイリガイ*Oncomelania nosophora*の習性研究」『動物学雑誌』61（3･4））が、漢字表記の「宮入貝」が主体的に使用される。「片山貝」は漢字表記で使用されることもあるが、片仮名表記の「カタヤマガイ」が主体的に使用される。

8. 昭和30年代以降から現代までの和名

昭和30年代前半では漢字表記の「宮入貝」と片仮名表記の「ミヤイリガイ」の両方が混在して使用されているが、昭和30年代後半以降は片仮名表記の「ミヤイリガイ」の使用が通用となり、現在に至っている。「カタヤマガイ」も片仮名表記の使用が通用となり、生物学（「日本産カタヤマガイ属の分類」『医学と生物学』昭和28年、『生物学概論』 昭和30年、『生物の研究』3訂版 昭和31年）、貝類学（「片山貝（宮入貝）の解剖学的研究」『貝類学雑誌ヴヰナス』18（3）昭和30年、『山口県産貝類目録』山口県立山口博物館　昭和31年、「第11回太平洋学術会議に於ける各国貝類学者の活動」貝類学雑誌24（3－4）昭和42年、「鳥取県の陸産貝類」『鳥取県立博物館研究報告』13 昭和51年、「淡水産貝類の生息環境」『環動昆』(9）4 平成10年）、動物学（「綱 腹足類」『動物分類表』 昭和33年、『動物系統分類学　第5巻下』 平成10年、『動物系統分類学別巻』 平成14年）等の生物系の論文においては片仮名表記の「カタヤマガイ」が専ら広く使用されている。

岡山県（「岡山県下吸虫類中間宿主の研究（1）『マメタニシ』の発育と水質」昭和28年、「日本住血吸虫症の免疫病理学的研究」『岡山医学会雑誌』103（3）平成3年、「桂田富士郎と日本住血吸虫発見100年」『岡山医学会雑誌』117（1）平成17年）や広島県（「吉田龍蔵（医人伝）」『広島医学』27（3）昭和49年）では、漢字表記の「片山貝」と片仮名表記の「カタヤマガイ」が使われている。

昭和48年のNHKのレポートでは、「宮入貝」としながら、標準和名は「カタヤマガイ」であると記している（『NHK文研月報：the NHK report on broadcast research』23(6)）。

この段階では、漢字表記で「宮入貝」と使われることもあるが、「カタヤマガイ又は宮入貝」、「片山貝または宮入貝」と並列表記する場合、「かたやまがい一名みやいりがい」と平仮名表記する場合、「片山貝（別名ミヤイリガイ）」、「カタヤマガイ（ミヤイリガイ）」と優位表記する場合などが見られ、一様でない面もあるが、片仮名表記の「ミヤイリガイ」と「カタヤマガイ」の使用が広く認められる。

9.「ミヤイリガイ」と「カタヤマガイ」の和名併存

現在に至るまでの和名の歩みをたどると、昭和30年代前半までは漢字表記･片仮名表記の和名が併存混在している状況であるが、昭和30年代後半以降では、片仮名表記の和名使用が広がるようになる。寄生虫学会や病理学会等の医学系の分野では「ミヤイリガイ」が専ら用いられている傾向が強い。

「和名はカタヤマガイであるが、医学関係では発見者を顕彰してミヤイリガイと呼ばれる」（『地方病とのたたかい―地方病流行終息へのあゆみ―』平成15年）と発見者宮入の名を冠した和名の経緯について記している。

これに対して貝類分類学･動物分類学などの生物系分野では「カタヤマガイ」を用いる傾向が強いことが伺える。貝類学･動物学･植物学等では、分類･命名する場合に、人と自然との関係性や生活文化体系等を反映した人にとって意味のある恣意的な和名を付してきたところがある。産出地や地名、土地名などを和名につける場合もある。こうした点を鑑みると、生物系分野では「片山記･片山病･片山地方」という有病地に由来する「カタヤマガイ」を優位に使用しているのではないかと思われる。

平成7年には、森田久男が「宮入貝と呼ばれるようになったが、実は鈴木貝とするのが正しいだろう」（「MEDICAL ESSAYS　甲府盆地の地方病にまつわる思い出（上）」『日本医事新報』3717）と和名呼称の歩みの中で、唯一「鈴木貝」と主張している事例が見られる。

「ミヤイリガイ」と「カタヤマガイ」の両者の和名は、それぞれが依拠する医学系と生物学系の学問体系によって使い分けられ、両者が併存して使われているのが現在の学界の状況とともに和名使用の状況であると言える。

◆宮入貝／ミヤイリガイ　片山貝／カタヤマガイの和名（両者の和名を単独表記・並列表記・優位表記を区別して記す）

西暦	和暦	和名／宮入貝・ミヤイリガイ	和名／片山貝・カタヤマガイ	引 用 文 献
1913年	大正2年	一種の蝸牛		「日本住血吸虫ノ発育ニ関スル追加」 宮入慶之助・鈴木稔 『東京医事新誌』(1836) (大正2年9月13日発行)
1913年	大正2年	蝸牛		「日本住血吸虫の中間宿主附同虫病の予防(佐賀県三養基郡医師会席上にて)」 宮入慶之助 『東京医事新誌』(1839) (大正2年10月4日発行)
1913年	大正2年	河貝子		「日本住血吸虫ノ発育ニ関スル宮入鈴木両氏ノ発見ニ就テ」 土屋岩保 『東京医事新誌』(1840) (大正2年10月発行)
1913年	大正2年	一種の蝸牛 水中に住んで居る一種の蝸牛で(学名は未詳)で此の蝸牛はカハギラの住んで居る小川や小溝などには沢山住んで居る介殻虫で一見カハギラと区別し難い程カハギラに酷似しているが全然別種の者で・・・・		「地方病中間宿主発見顛末(一)」 『山梨日日新聞』10月10日記事 山梨日日新聞社
1913年	大正2年	河貝子科 河貝子科ニ属スルヲ知ル進ミテ詳細ニ其種ヲ定ムルハ文献達シ難クシテ力ニ及バズ或ハ既知ノモノタルベキカ抑亦新種ナルベキカ記シテ以テ専門家ノ決定ヲ待ツ		「日本住血吸虫病調査報告」 宮入慶之助 官報(404) 大蔵省印刷局編 (大正2年12月2日発行)
1913年	大正2年	一小巻貝 日本住血吸虫ノ中間宿主タル一小巻貝ハ・・・Blandfordia A.Adams(ラカマメダニシ)ニ属シ、未ダ嘗テ知ラレザル一新種ニテ・・・		「日本住血吸虫ノ『セルカリア』ト宿主体内ニ於ケル感染当時ノ幼若虫トニ就テ附該病予防に関スル知見ノ補遺(承前)」 宮川米次 『医事新聞』(891) 医事新聞社
1914年	大正3年	水棲蝸牛		「吸虫の研究に就て」 宮入慶之助 『日本医事週報』(979) 大正3年1月1日発行 日本医事週報社
1914年	大正3年	水棲蝸牛		「日本住血吸虫のツェルカリア」 宮入慶之助 『医事新聞』(895) 医事新聞社
1914年	大正3年	特殊蝸牛		「日本住血吸虫中間宿主ノ動物学上ノ所属(学会)」 鈴木稔 『福岡医科大学雑誌』7(5)
1914年	大正3年	小蝸牛		「東洋ニ於ケル病原的吸虫類ニ就テ殊ニ其発育史ニ注意ヲ払フ」 桂田富士郎 『台湾医学会雑誌』141
1914年	大正3年	蝸牛 余ハ一時此蝸牛ハ河貝子科ニ属スベキモノト思惟シタルモ、爾後成書文献ヲ参照シ進ムニ従ヒ、今ハ之ヲ「ヒドロビイデHydrobiidae」ニ入ルルヲ以テ至当ト信ズルニ至レリ		「微生物学 哺乳動物ニ於ケル日本住血吸虫」 宮入慶之助 『日新医学』第参巻3(9) 日新医学社 (大正3年9月発行)
1914年	大正3年	小河貝子(しょうかわにな) 学名未定ナレバ此ニ仮リニ小河貝子ト云フ		「茨城県北相馬郡高野村地方ニ於ケル日本住血吸蟲病ニ就テ」 高木乙熊 『細菌学雑誌』1914巻228号 (1914年10月10日発行)
1915年	大正4年	日本名なし この中間宿主は、小さく細長き巻貝でありまして、この方面の専門家岩川理学士により学名「ヒドヒビス」とつけられたそうに承知して居りますが、まだ肝腎な日本名をば、授けられないようであります。		「講演 内臓寄生虫」宮入慶之助 (大正4年2月9日九州医科大学講演会にて講演) 『臨床医学』3(8) 臨床医学社
1916年	大正5年		片山貝	「福井県今立郡医師研究会 一、片山病の原因たる日本住血吸虫の中間宿主たる片山貝石標本供覧」 古川田溝 『医海時報』(1126) (大正5年1月22日発行) 医海時報社
1916年	大正5年	宮入氏巻貝		「日本住血吸虫病ノ療法ニ就て」 土屋岩保 『日本消化機病学会雑誌』15(2) (大正5年3月20日発行)
1916年	大正5年		片山貝	「台湾ニ於ケル日本住血吸虫ノ中間宿主ニ就テ」 横川定 『台湾医学会雑誌』一六三、一六四號 台湾医学会 (大正5年6月発行)
1917年	大正6年	宮入貝		「宮入貝の山を築く 宮入博士の視察」 『山梨日日新聞』大正6年4月15日記事
1917年	大正6年		片山貝	「住血吸虫の原因と中間宿主の片山貝の習性等を幻燈にて・・・・」無頼庵 『医海時報』1225 医海時報社
1917年	大正6年	宮入貝		「衛生時代観 野糞拾ヒ貝拾ヒ」 『大日本私立衛生会雑誌』4月号(408) 大日本私立衛生会
1917年	大正6年	宮入貝 宮入博士に発見されてから、此の貝の事を「宮入貝」と言ふのだ。		『俺は地方病博士だ (日本住血吸虫病の話)』 山梨県地方病研究部(5月発行)
1917年	大正6年	宮入貝(Blanfordia nosophora)		「談論 蛍の幼虫は日本住血吸虫中間宿主の最有力なる害敵なり」 宮島幹之助・奥村多忠・高木省三 『医海時報』(1197) 6月発行 医海時報社
1917年	大正6年	宮入貝 「・・・豫防の上に於て特に注意すべきは特別なる貝即ち私は特に「宮入貝」(みやいりがい)と呼んで居るが此貝を自然的に駆除する事が理想的だと思ふ・・・」		「蛍を捕るな」宮島幹之助 『日本農業雑誌』13(8)七月號 日本農業社
1917年	大正6年	宮入貝 発見者の名によって宮入貝と名づけられている。		「第二篇 食後の半時 一四四 日本住血吸虫」 小竹散人 『小竹千話 続』 出版社滝村竹男(8月刊行)
1917年	大正6年	七巻貝(宮入貝)		「雑報」 『広島衛生医事月報』第19年(223)
1917年	大正6年		片山貝	「学会 第四十九回例会 第四席 日本住血吸虫『セルカリア』供覧」 川村麟也 『北越医学会雑誌』 第32年(3)(214) 北越医学会
1917年	大正6年		片山貝	「第十八回北里研究所同窓会記事 三三、日本住血吸虫ノ中間宿主ニ関する観察」 高本省三 『細菌学雑誌』1917(259)
1917年	大正6年	宮入貝		「農界時報 蛍は益虫だ」(宮島幹之助氏談) 農事新報＝The Agricultural jounal 11(7)(124) 農事新報社
1918年	大正7年	宮入貝		「一八 山梨縣 附山梨縣ニ於ケル保健調査」 『人体寄生虫病調査概況』 内務省衛生局保健衛生調査室編 内務省衛生局
1918年	大正7年	宮入貝(片山貝)		「病理學及病理解剖學 一一三静岡縣富士郡須津沼地方ニ於ケル海水侵入ガ日本住血吸蟲中間宿主宮入貝ニ及ボセル影響ニ就テ」 武藤昌知・宇佐美鍵一 『医学中央雑誌＝Japana centra revuo medicina』16 医学中央雑誌刊行会
1918年	大正7年	宮入貝(片山貝)		「衛生上有害動物ノ自然的駆除法(講演)」 宮島幹之助 『大日本私立衛生会雑誌』(419) (大正7年3月発行)
1918年	大正7年	宮入貝又は片山貝		「輓近ニ於ケル寄生虫病学ノ進歩ニ就テ」 宮川米次 『実際医学』10(8)(128) 実際医学新報社 (大正7年4月発行)
1918年	大正7年		片山貝	「雑報 人間の害虫を駆除する蛍」(都新聞) 『病虫害雑誌』5(6)
1919年	大正8年	巻 貝 宮入自身は、ただ巻貝とだけ言っている。		「寄生虫病及地方病豫防」 医学博士宮入慶之助講演 内務省衛生局主催「公衆衛生講習会」ニ於テ
1919年	大正8年		片山貝(Katayama nosophora)	「日本住血吸虫病(臨床講義)(上)」 長尾美知 『実験医報』第5年(59) 克誠堂書店
1919年	大正8年		片山貝	「抄録 病理学及病理解剖学 六二 日本住血吸虫中間宿主ノ生物学的研究」 山内順一(第九回日本病理学会演説 大正八年四月) 『医学中央雑誌＝Japana centra revuo medicina』17(6)(309)
1920年	大正9年	ミヤイリガイ		「朝鮮人の腸寄生虫附虫卵の異型 二 各種寄生虫の分布に就ての私見 十一 日本住血吸虫」 小林晴治郎 『日本之医界』10(41) 日本之医界社

西暦	和暦	和名／宮入貝・ミヤイリガイ	和名／片山貝・カタヤマガイ	引 用 文 献
1921年	大正10年	宮入貝		「日本住血吸虫体自己ノ生活現象ニ因スル成長家兎ノ病理解剖珠ニ肝臓病変ニ関スル一知見」 風間美顕 『北越医学会雑誌』 第36年(5)(240) 北越医学会
1921年	大正10年	巻貝 この段階でも宮入自身は、巻貝と言っている。		「寄生虫病及地方病予防 住血吸虫(1)～(10)」宮入慶之助 『日本医事週報』(1358・1359・1360・1363・1364・1370・1371・1374・1383・1390) 日本医事週報社
1922年	大正11年	宮入貝		「第二編 栄養系統 第一章 消化器」 『新撰整理衛生』上巻 増訂改版 松下禎二纂著 裳書房
1923年	大正12年	宮入貝(蛍貝)		「第一編 気候風土の要素 10地方病は在るか無いか 吸虫病」 『福岡県の気候と風土』 福岡一等測候所調査 福岡県福岡測候所
1923年	大正12年	びな 蜷(宮入貝のこと)		「第四章 風俗習慣 第五節 言語」 『大沼郡誌』 大沼郡編 大沼郡(福島県)
1924年	大正13年	一種の巻貝(宮入貝、又は片山貝)		「診断と療法 第十三章 人体に於ける動物性及植物性寄生物(続)」 長岐佐武郎纂録 『医事新聞』(1137) 医事新聞社
1925年	大正14年	宮入貝		「第二篇 疾病篇 第二節寄生虫病」 岡部庸三郎 『熱帯衛生』 聚英閣
1925年	大正14年	ミヤイリ貝(宮入貝) 一名片山貝(Blanfordia nosophora)		「第四編生活現象 第三章寄生動物―日本住血吸虫」 『生物学精義』7版 岡村周諦 瞭文堂
1926年	大正15年	みやいりがひ(Blanfordia) 一に片山貝ともいふ		「第七門 軟体動物」 『動物学精義 各論 中巻』 恵利恵 目黒書店
1927年	昭和2年	宮入貝 ビナ 「会津の大沼郡では宮入貝が即ちビナだといふ・・・」		「蝸牛考(完)」 柳田国男 『人類学雑誌』42(7) 日本人類学会
1927年	昭和2年	特殊蝸牛(所謂宮入貝)		『明治大正日本医学史:附・日本医育史再版』 田中勇吉 東京医事新誌局
1927年	昭和2年	ミヤイリガイ・カタヤマガイ		『日本動物図鑑 〔分冊〕』 内田清之助等著 北隆館
1928年	昭和3年		片山貝	「日本住血吸虫ノ終宿主体内ニ於ケル発育及ビ其構造ニ就テ(承前)」 多田繁 『岡山医科大学紀要』(11) 岡山医科大学
1928年	昭和3年		片山貝	「日本住血吸虫ノ『ツエルカリア』ニ就テ」 高橋昌造 『岡山医科大学紀要』(11) 岡山医科大学
1928年	昭和3年		片山貝(宮入貝)Katayama nosophora Robson	『動物系統解剖学』 戸沢富寿 内田老鶴圃
1929年	昭和4年	小さい巻貝で「まめたにし」の類のもの		「二 人体寄生虫の種類及び其等の意義 四日本住血吸虫」 『寄生虫国日本』 小泉 丹 岩波書店
1930年	昭和5年	宮入貝 ビナ 「会津の大沼郡の方言集には、ビナとは宮入貝のことだと謂って居るが、是も亦同じ川蜷である。」		『蝸牛考』 柳田国男 刀江書院
1930年	昭和5年	宮入貝		「寄生虫学篇 日本住血吸虫」 小泉丹・小林晴二郎 『現代医学大辞典 寄生虫細菌・衛生科学篇』 春秋社
1931年	昭和6年	宮入貝		「日本住血吸虫中間宿主宮入貝の生物学的研究(第1報)」 杉浦三郎 『東京医事新誌』(2688) 東京医事新誌局
1931年	昭和6年		片山貝	『岡山県下ニ産スル特殊動物並ニ該動物ニ関スル研究論文目録』 山県編 岡山県
1931年	昭和6年	片山貝又は宮入貝		『人体寄生虫学』第1巻 横川定・森下薫 吐鳳堂書店
1932年	昭和7年		片山貝	「人体内臓寄生虫ノ侵入門戸ニ就テ特ニ腟腔乃至子宮腔内感染ニ関スル実験的研究」 栗栖荘太郎 『成医会雑誌』50(12) 東京慈恵会医科大学
1932年	昭和7年	宮入貝	片山貝(Blanfordir)	「第一章 第四節天産」 『久留米市誌』 久留米市役所
1933年	昭和8年		カタヤマガヒ 片山貝(マメタニシ科) Oncomelania(Katayama) nosophora	『有用有害鑑賞水産動植物図説』 雨宮育作当著 大地書院
1934年	昭和9年	宮入貝 片山貝		「日本住血吸虫の雌雄両性は其発育圏の何れの時期に於て岐るる？」 橋本虎男 『日本之医界＝The Nippon medical world』24(15)
1935年	昭和10年	宮入貝		「寄生虫による被害と其の予防」 岸本亮一 『家事と衛生』11(5) 家事衛生研究会
1935年	昭和10年		「まめたにし」の類の「かたやまがひ」	『人体寄生虫通説』 小泉 丹 岩波全書57 岩波書店
1936年	昭和11年		片山貝	「前記中間宿主片山貝の発見者鈴木教授で・・・」 『岡山民報縮刷版:オール読物 昭和11年度版』 岡山民報社
1936年	昭和11年		片山貝	「冷血動物体内『スピロヘータ』ノ研究(2)」 栖田衛治 『十全会雑誌』41(8)(372) 金沢医科大学十全会
1937年	昭和12年	宮入貝		「宮入貝の産地視察記」 岩田正俊 『大阪博物館学会誌』8 大阪博物館学会
1937年	昭和12年		片山貝	「日本住血吸虫ケルカリアの游出に関する知見補遺」 小坂清石 『台湾医学会誌』36(12)393
1938年	昭和13年		片山貝	『広島県産貝類目録』 滝巌 広島県
1939年	昭和14年	カタヤマガヒ 片山貝 又は ミヤイリガヒ 宮入貝		「宮入貝の産地観察記(2)」 岩田正俊 『吉田博士祝賀記念誌(論文篇)』
1939年	昭和14年		宮入貝	「宮入貝に関する知見」 造力武彦 『吉田博士祝賀記念誌(論文篇)』
1940年	昭和15年	宮入貝		「日本住血吸虫中間宿主宮入貝棲息と地質との関係性に就きて」 加藤龍雄 名古屋帝国大学 医学博士 博士論文
1940年	昭和15年	宮入貝		「蛍の人工飼育実験特にその幼虫の日本住血吸虫中間宿主宮入貝に対する衛生学的価値について」 原志免太郎 『九大医報』14(4)・(5) 九大医報編集部
1940年	昭和15年		カタヤマガイ *(Katayama hupensis)*	「雑録 中支の貝類採集」 瀧 庸 『ヴヰナス』10(2) 日本貝類学会
1941年	昭和16年		片山貝 一名宮入貝	『昆虫読本』 中西悟堂 日新書院
1942年	昭和17年	宮入貝		「第二篇風土病 第十一章寄生蟲に因る病気」 有馬玄 『風土病誌』 積善館
1943年	昭和18年	宮入貝又は片山貝		『野原の生物』 岩田正俊 文祥堂
1944年	昭和19年	宮入貝(片山貝)		『人体寄生虫』 岩田正俊 東洋図書
1945～1948年文献なし				
1948年	昭和23年	みやいりがい		「第七篇 動物の分類」 大野量平 『最新学生の動物学』 清水書院
1949年	昭和24年		片山貝	「Ⅳ. 寄生虫性疾患科会研究報告 10. 日本住血吸虫予防法の研究」長野寛治 『風土病研究』 風土病研究特別委員会編 日本医学雑誌
1949年	昭和24年		カタヤマガイ	『寄生虫の話(うち中で読む科学の本;第10)』 小泉丹 主婦之友社
1950年	昭和25年		カタヤマガイ	『基礎動物学』 森田淳一 裳華房
1950年	昭和25年	宮入貝		「筑後川流域に於ける宮入貝の分布に就いて」 橋本道雄・富松毅・中島敏郎 『久留米医学会雑誌』13(7・8) 久留米医学会
1951年	昭和26年		カタヤマガイ	『日本貝類図鑑:日本列島及その附近産 天然色写真版』 平瀬信太郎他 文教閣
1952年	昭和27年	ミヤイリガイ *Oncomelania nosophora*		「ミヤイリガイ *Oncomelania nosophora*の習性研究」 小林晴二郎・川本修二 『動物学雑誌』61(3・4)
1952年	昭和27年	宮入貝		「日本住血吸虫中間宿主宮入貝の撲滅に関する研究―1～3―」 津田栄造 『東京医事新誌』69(1) 東京医事新誌局
1952年	昭和27年		かたやまがい *Katayama(Oncomelania)*	「第2章 部類及び種類の概説 1 吸虫類 日本住血吸虫」 小泉丹 『人体寄生虫』 岩波書店

西暦	和暦	和名／宮入貝・ミヤイリガイ	和名／片山貝・カタヤマガイ	引 用 文 献
1953年	昭和28年		カタヤマガイ	「日本産カタヤマガイ属の分類」 福田眞杉 『医学と生物学：速報学術雑誌』28(6) 医学生物速報会
1953年	昭和28年		片山貝	「岡山県下吸虫類中間宿主の研究 (1)「マメタニシ」の発育と水質」 稲臣成一 『岡山医学会雑誌』65(1) 岡山医学会
1953年	昭和28年		カタヤマガイ	『最新寄生虫病学 第6分冊』 森下薫 医学書院
1954年	昭和29年		カタヤマガイ	『日本資源文献目録 1880-1950 第1』 総理府資源調査会
1955年	昭和30年	宮入貝		『佐賀県の日本住血吸虫病研究史』 片淵秀雄 自家出版
1955年	昭和30年		片山貝(宮入貝)	「片山貝(宮入貝)の解剖学的研究」 板垣博 『貝類学雑誌ヴヰナス』18(3) 日本貝類学会
1955年	昭和30年		カタヤマガイ	『生物学概論』 井上清恒 三省堂出版
1956年	昭和31年	宮入貝		「寄生虫病予防法の一部を改正する法律 一提案理由(五月十八日)」 『第二十五回国会制定法審議要録』 衆議院法制局
1956年	昭和31年		カタヤマガイ(ミヤイリガイ)	『生物の研究』 3訂版 沼野井春雄 旺文社
1956年	昭和31年	ミヤイリガイ(カタヤマガイ)		「彙報 疾病と関係ある貝類」 小林晴次郎他 『日本医事新報』1690 日本医事新報社
1956年	昭和31年		カタヤマガイ(一名ミヤイリガイ)	『山口県産貝類目録』 河本卓介・田辺澄生編 山口県立山口博物館
1957年	昭和32年	宮入貝		「日本住血吸虫の中間宿主(Oncomelania nosophora)体内に於ける発育に関する研究」 大田秀浄(山梨県立医学研究所) 『北関東医学』1957年7(5)
1958年	昭和33年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイの乾燥に対する抵抗性」 小宮義孝 『寄生虫学雑誌』7(6) 日本寄生虫学会
1958年	昭和33年		カタヤマガイ	「綱 腹足」(ふくそく)類」 『動物分類表』 今村泰二 北隆館
1959年	昭和34年	宮入貝		『広島県に於ける日本住血吸虫病(片山病)の概況』 広島県衛生部
1959年	昭和34年	宮入貝		「日本住血吸虫中間宿主(宮入貝)の習性に関する研究」 佐藤重房・大田秀浄 『北関東医学』9(4)
1959年	昭和34年	ミヤイリガイ		「第五章ジストマ(吸虫)と風土病 一日本住血吸虫病」 佐々 学 『日本の風土病』 法政大学出版局
1960年	昭和35年	宮入貝		「宮入貝の越冬に関する研究」 本田三仁 『久留米医学会雑誌』23(5)
1960年	昭和35年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイの交尾状況とその殻微との関係について」 橋本魁 『寄生虫学雑誌』9(1) 日本寄生虫学会
1960年	昭和35年	片山貝または宮入貝		「第3編 扁形動物門 第1章 吸虫綱」 『新寄生虫病学』 森下哲夫・加納六郎共著 南山堂
1961年	昭和36年	宮入貝(片山貝とも呼ばれる)		「日本に於ける寄生虫学発達史」 森下薫 『日本における寄生虫学の研究 Ⅰ』 森下薫編輯者代表 財団法人目黒寄生虫館
1961年	昭和36年	宮入貝或いは片山貝 1913年佐賀県下で・・未知の新巻貝を発見・・・和名は宮入貝或いは片山貝と命名された。		「日本住血吸虫及び日本住血吸虫症の生物学及び疫学」 岡部浩洋 『日本における寄生虫学の研究 Ⅰ』 森下薫編輯者代表 財団法人目黒寄生虫館
1961年	昭和36年	ミヤイリガイ		「日本住血吸虫症の予防」 小宮義孝 『日本における寄生虫学の研究 Ⅰ』 森下薫編輯者代表 財団法人目黒寄生虫館
1961年	昭和36年		カタヤマガイ *K.nosophora Robson*	「八重山群島与那国島産のタイワンカタヤマガイの1新亜種」 波部忠重 (タイワンカタヤマガイ・ヨナクニカタヤマガイ) 『貝類学雑誌ヴヰナス』21(3) 日本貝類学会
1962年	昭和37年		カタヤマガイ	「静岡県の日本住血吸虫病-2-」 伊藤二郎 『寄生虫学雑誌』11(5) 日本寄生虫学会
1963年	昭和38年	ミヤイリガイ		「日本住血吸虫感染ミヤイリガイの研究 偶配子形成〔英文〕」岡本謙一 『寄生虫学雑誌』12(6) 日本寄生虫学会
1964年	昭和39年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイの殺貝に関する研究ー8・9ー」 小宮義孝 『寄生虫学雑誌』13(1) 日本寄生虫学会
1965年	昭和40年	ミヤイリガイ		「寄生虫病予防法の一部を改正する法律 一提案理由(五月十三日)」 『第四十八回国会制定法審議要録』 衆議院法制局
1965年	昭和40年		カタヤマガイ	『日本薬局方註解 第7改正 第1部』 南江堂
1966年	昭和41年		かたやまがい 一名みやいりがいともいう	「第四編 自然 第二章生物 一動物」 『佐原市史』 佐原市
1967年	昭和42年		カタヤマガイ類	「第11回太平洋学術会議に於ける各国貝類学者の活動」 波部堀越 『貝類学雑誌』24(3-4)
1967年	昭和42年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイの行動、とりわけ暗黒化のそれについて」(英文) 安羅岡一男 『寄生虫学雑誌』16(2) 日本寄生虫学会
1967年	昭和42年		カタヤマガイ	『虫の歳時記』 古川晴男 読売新聞社
1968年	昭和43年	片山貝または宮入貝		『臨床医のための寄生虫病学』(新臨床医学文庫) 森下哲夫 金原出版
1968年	昭和43年	片山貝 宮入貝 宮入慶之助、鈴木稔氏らの研究によって、「片山貝」と決定される大発見があった。本県では発見者の業績をたたえて「宮入貝」と名づけている。		「第四編山梨県医師会の歩み 第一章省令医師会時代 第八節大正二年の動き」 上野晴郎 『山梨県医師会誌』
1969年	昭和44年	ミヤイリガイ		「XI. 寄生虫部」 『国立予防衛生研究所年報』22(昭和43年度) 国立予防衛生研究所
1970年	昭和45年	ミヤイリガイ		「水田内におけるミヤイリガイ個体群の生態学的研究」 伊藤洋一 『寄生虫学雑誌』19(5) 日本寄生虫学会
1970年	昭和45年	宮入貝		「寄生虫にみられる宿主 寄生関係について」 大家裕 『順天堂医学』15(4) 順天堂医学会
1971年	昭和46年		カタヤマガイ	『衛生検査技師講座 第19 第2版』 樫田良精・小酒井望編 医学書院
1972年	昭和47年	ミヤイリガイ		「筑後川流域産ミヤイリガイに寄生するCercaria longissima Faust,に関する若干の知見」蒲池純久 『寄生虫学雑誌』21(1) 日本寄生虫学会
1973年	昭和48年	宮入貝(標準和名はカタヤマガイ)		『NHK文研月報：the NHK report on broadcast research』23(6) NHK総合放送文化研究所編
1973年	昭和48年		片山貝 Blanfordir	「第一章 地理 第四節 天産」 『久留米市誌』上編 名著出版
1974年	昭和49年	ミヤイリガイ(またはカタヤマガイ)		『医寄生虫学』 石崎 達編 第一出版
1974年	昭和49年		片山貝	「吉田龍蔵(医人伝)」石田憲吾 『広島医学』27(3)(278) 広島医学会
1975年	昭和50年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイに対する数種薬剤の刺貝効果について：(2)野外における殺貝効果」 梶原徳昭他 『山梨県立衛生公害研究所年報』昭和50年(219)
1975年	昭和50年	宮入貝		「日本住血吸虫一教室の業績を中心として」 岡部浩洋 『久留米医学会雑誌』38補冊
1976年	昭和51年	ミヤイリガイ		山梨県の日本住血吸虫病一有病地におけるミヤイリガイに対する感染住血吸虫の性比について」 見目道子 『寄生虫学雑誌』25(5) 日本寄生虫学会
1976年	昭和51年		カタヤマガイ	「鳥取県の陸産貝類」 清末忠人・谷岡浩・石坂元・中島良典 『鳥取県立博物館研究報告』13
1977年	昭和52年	宮入貝・ミヤイリガイ		『地方病とのたたかい』 山梨県地方病撲滅協力会

西暦	和暦	和名／宮入貝・ミヤイリガイ	和名／片山貝・カタヤマガイ	引　用　文　献
1977年	昭和52年		片山貝（別名ミヤイリガイ）	『月刊百科』(179) 平凡社
1978年	昭和53年	宮入貝　片山貝		「病気と薬剤―27　寄生虫症と薬剤」 斉能正則 『日本薬剤師会雑誌』30(5)　日本薬剤師会
1979年	昭和54年	ミヤイリガイ		『地方病は死なず　山梨県「日本住血吸虫病」の実態』 泉　昌彦　新泉社
1979年	昭和54年	宮入貝 宮入慶之助・鈴木稔両氏によって発見され命名された宮入貝		『片山病とのたたかい』 御下問奉答片山病撲滅組合
1980年	昭和55年		かたやまがい　一名みやいりがい	『佐原市史　』 大和学芸図書
1980年	昭和55年		カタヤマガイ	『長崎県勝本町漁業史』 勝本町漁業協同組合勝本町漁業史作成委員会
1981年	昭和56年	ミヤイリガイ・宮入貝 宮入貝の発見は宮入先生と鈴木先生の協力によるもののようですが、何かの機会に鈴木先生が、本当はあれは俺が見付けたんだということをいわれたらしいです。それを聞かれた宮入先生が、非常に憤慨されて、「鈴木を呼んで来い」といわれたそうですよ。		『寄生虫学会50年の歩み　(1929－1979)』 日本寄生虫学会 座談会での宮崎一郎氏の発言
1981年	昭和56年	ミヤイリガイ		『地方病とのたたかい　日本住血吸虫病・医療編』 山梨県地方病撲滅協力会
1981年	昭和56年		カタヤマガイ（一名ミヤイリガイ）	『柏のむかし　続』 柏市史編さん委員会編　柏市
1982年	昭和57年		カタヤマガイ	『皆野町誌　自然編3（動物）』 皆野町誌編集委員会編　皆野町
1983年	昭和58年		カタヤマガイ	「寄生貝と共生貝」 波部忠重・武田正倫 『季刊自然科学と博物館』50(1)　科学博物館後援会編
1984年	昭和59年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイに対する数種薬剤の殺貝効果について：(3)ニクロサマイドの殺貝効果」 梶原徳昭 『山梨県立衛生公害研究所年報』昭和59年(28)
1985年	昭和60年		カタヤマガイ	「ペンタクロロフェノール中毒」 井上尚英 『日本災害医学会会誌』33(2)　日本災害医学会
1986年	昭和61年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイに対する数種薬剤の殺貝効果について：(6)Tribromosalonの殺貝効果」 梶原徳昭他 『山梨県立衛生公害研究所年報』 昭和61年(30)
1986年	昭和61年	ミヤイリガイ（宮入貝） 発見者の宮入教授を記念してこの小巻貝は「宮入貝」と呼ばれるようになった。		『筑後川流域における日本住血吸虫病撲滅史』 塘　普 水資源開発公団筑後川開発局　筑後大堰管理所
1987年	昭和62年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイに対する数種薬剤の殺貝効果について：(7)殺虫剤Cartapの殺貝効果」 梶原徳昭他 『山梨県立衛生公害研究所年報』昭和61年(31)
1988年	昭和63年	宮入貝 発見された貝を「宮入貝」と和名を付け、後世に伝えられている		『ジストマとの戦い　生まれ変わる筑後川』 塘　普 水資源開発公団筑後川開発局　筑後大堰管理所
1988年	昭和63年	ミヤイリガイあるいはカタヤマガイという		『図説人畜共通寄生虫症』 宮崎一郎・藤　幸治 九州大学出版会
1989年	平成元年	宮入貝（片山貝ともいう）		「吸虫症」 荒木恒治 『小児科診療』52　増刊号　診断と治療社
1990年	平成2年		カタヤマガイ	「1988年日中医学交流会議　講演：中国の医学研究体制の現状」 顧英奇 『日中医学：(公財)日中医学協会機関誌：bulletin of the Japan China Medical Association』3(3/4)　日中医学協会
1991年	平成3年	宮入貝（ミヤイリガイ）		『佐賀県の日本住血吸虫病―安全宣言への歩み―』 佐賀県
1991年	平成3年		カタヤマガイ（ミヤイリガイ）	「日本住血吸虫症の免疫病理学的研究」 太田伸生ほか7名 『岡山医学会雑誌』103(3)　岡山医学会
1992年	平成4年	宮入貝		「日本住血吸虫卵が介在した異時性多発早期大腸癌の1例」 安永昭他5名 『日本大腸肛門病学会雑誌』45(6)
1993年	平成5年	ミヤイリガイ		「ミヤイリガイに対する数種薬剤の殺貝効果について：(8)市販農薬のミヤイリガイ殺貝効果」 梶原徳昭他 『山梨県立衛生公害研究所年報』平成5年(37)
1993年	平成5年	ミヤイリガイ		「筑後川流域由来日本住血吸虫セルカリアの游出特性とミヤイリガイの地位的感受性の差異―日本住血吸虫症の予防に関する研究　第ＸＸⅧ報―」 高尾善則 『久留米医学会雑誌』(56)　久留米医学会
1994年	平成6年	ミヤイリガイ		「人類と生物の共生を考える」 竹林征三 『河川』(570)　日本河川協会
1995年	平成7年	宮入貝・鈴木貝 宮入貝と呼ばれるようになったが、実は鈴木貝とするのが正しいだろう		「MEDICAL ESSAYS　甲府盆地の地方病にまつわる思い出（上）」森田久男 『日本医事新報』3717　日本医事新報社
1995年	平成7年		片山貝	「MEDICAL・ESSAYS　日本住血吸虫とのたたかい（上）」井内正彦 『日本医事新報』(3729)　日本医事新報社
1996年	平成8年	宮入貝（ミヤイリガイ）		『日本住血吸虫症診療マニュアル』 山梨県（山梨県衛生公害研究所　生物研究専門部）
1997年	平成9年	ミヤイリガイ		「所属リンパ節に日本住血吸虫卵を認めた早期胃癌の一例」 中尾篤典ほか5名 『広島医学』50(10)　広島医学会
1998年	平成10年	ミヤイリガイ 「学会では、名称決定にあたって当然のように発見者の宮入にちなみ『ミヤイリガイ（宮入貝）』と決めた。宮入は至極恐縮して、『片山記』に敬意を表してカタヤマガイ（片山貝）と呼んではどうか、と提案、ミヤイリガイ、カタヤマガイのどちらでの名称でも登録されることになった。」		『死の貝』 小林照幸 文藝春秋 「ミヤイリガイ（宮入貝）」と決めた明確な文献資料はないが、本書を執筆する際の小林氏による住血吸虫症対策のレジェンド的な研究者からの聞き取り証言。また各大学で語り継がれてきた逸話による。
1998年	平成10年		カタヤマガイ	「淡水産貝類の生息環境」 近藤高貴 『環動昆』(9)4　日本環境動物昆虫学会
1998年	平成10年		カタヤマガイ	『動物系統分類学　第5巻　下　(軟体動物2)』 内田亨・山田真弓監修　中山書店
1999年	平成11年	ミヤイリガイ		「Ⅱ吸虫類　2．住血吸虫の生物学」 入江勇治 『日本における寄生虫学の研究　7』 大鶴正満・亀谷了・囃子滋生監修　目黒寄生虫館
1999年	平成11年	ミヤイリガイ		「Ⅱ吸虫類　6．ミヤイリガイの生物学」 安羅岡一男 『日本における寄生虫学の研究　7』 大鶴正満・亀谷了・囃子滋生監修　目黒寄生虫館
1999年	平成11年		O.(K.)nosophora カタヤマガイ	『兵庫県立人と自然の博物館収蔵資料目録　第3集　日本産貝類－菊池コレクション－目録』 兵庫県立人と自然の博物館生態研究部 兵庫県立人と自然の博物館
2000年	平成12年	宮入貝・ミヤイリガイ		『筑後川流域における日本住血吸虫病と宮入貝』 筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会
2001年	平成13年	ミヤイリガイ		「地方病（日本住血吸虫病）流行終息後におけるミヤイリガイの動態」 梶原徳昭・沢登勲・相川秀樹 『山梨県衛生公害研究所年報』45　山梨県
2002年	平成14年		カタヤマガイ	『動物系統分類学　別巻』 山田真弓監修他 中山書店
2003年	平成15年	宮入貝		「第2章シスト（日本住血吸虫症）とはこんな病気　宮入貝のいない所にシストは発生しない」『寄生虫との百年戦争　日本住血吸虫症・撲滅への道』 林　正高

西暦	和暦	和名／宮入貝・ミヤイリガイ	和名／片山貝・カタヤマガイ	引 用 文 献
2003年	平成15年	ミヤイリガイ 「宮入らが見いだしたこの小巻貝は、宮入自身は遠慮してカタヤマガイと呼ぼうと主張したが、ミヤイリガイと呼ばれることになった。」		「郷土のほこり　福岡の先賢医師72　熱帯医学史に残る光芒：宮入慶之助」多田功 『福岡県医報』№1320　平成15年2月号
2003年	平成15年	宮入貝・ミヤイリガイ 「和名はカタヤマガイであるが、医学関係では発見者を顕彰してミヤイリガイと呼ばれる」		『地方病とのたたかい―地方病流行終息へのあゆみ―』 山梨地方病撲滅協力会
2004年	平成16年	ミヤイリガイ		「日本住血吸虫発見100年」 『週刊医学のあゆみ』208(2)　医歯薬出版株式会社
2005年	平成17年	ミヤイリガイ・宮入貝		『住血吸虫症と宮入慶之助：ミヤイリガイ発見から90年』 宮入慶之助記念誌編纂委員会編　九州大学出版会
2005年	平成17年		片山貝(宮入貝)	「桂田富士郎と日本住血吸虫発見100年」 小田晧二 『岡山医学会雑誌』117(1)　岡山医学会
2006年	平成18年	宮入貝 宮入にちなんでオンコメラニアは日本では宮入貝と呼ばれるようになった。		「宮入貝の物語　日本住血吸虫病と近代日本の植民地医学」 飯島渉 岩波講座『「帝国」日本の学知』第7巻　岩波書店
2006年	平成18年	カタヤマガイ・ミヤイリガイ		「解説篇　風土病の悲劇と徴兵制の重圧　ミヤイリガイかカタヤマガイか」 『病と癒しの民俗学』 礒川全次　批評社
2007年	平成19年	ミヤイリガイ		「第4章　その他の医動物によって起こる病気　日本住血吸虫病」 『人類とパラサイト』 石井明
2007年	平成19年		カタヤマガイ(*Oncomelania nosophora*)	「本邦におけるコモチカワツボの現状と課題」 浦部美佐子 『陸水学雑誌』68　日本陸水学会
2008年	平成20年	宮入貝		「日本における寄生虫防圧とその特質」 多田功 『Tropical Medicine and Health』36(3 SUPPLEMENT号)　日本熱帯医学会
2009年	平成21年	宮入貝		『感染症の中国史　公衆衛生と東アジア』 飯島渉 中公新書　中央公論新社
2010年	平成22年	ミヤイリガイ		「日本はこうして寄生虫病を制圧した　身近な虫たちの脅威」 小島荘明 中公新書　中央公論新社
2011年	平成23年		カタヤマガイ(ミヤイリガイ) oncomelania hupensis nosophora(ROBSON)	「鳥取県立博物館に寄贈された石坂元貝類コレクション―非海産腹足類－」 黒住耐二・一澤　圭・川上　靖 『鳥取県立博物館研究報告』(48)　鳥取県立博物館
2012年	平成24年	ミヤイリガイ		「面白い寄生虫の臨床(Ⅱ)　輸入寄生虫病－マラリアと人獣共通寄生虫症を中心に考える－」 大前比呂思 『日本獣医師会雑誌』65(11)　日本獣医臨床寄生虫学研究会編
2012年	平成24年	ミヤイリガイ		「日本のミヤイリガイを中心にその分布とGISによる監視」 二瓶直子 『日本衛生動物学会全国大会要旨抄録集』64(0)
2013年	平成25年	ミヤイリガイ		「資料　表2-1平成24年度衛生動物検査結果」 『山梨県衛生環境研究所』平成24年(56)　山梨県
2014年	平成26年		新生腹足目イツマデガイ科カタヤマガイ 絶滅	「貝類」 松隈明彦・石橋猛・川岸寛・山下博由 『福岡県の希少野生生物』 福岡県保健環境研究所
2015年	平成27年	ミヤイリガイ(Oncomelania hupensis nosophora)		「寄生虫・衛生動物の依頼検査の概要(2005－2014)」 高橋史恵 『山梨県衛生環境研究所年報』平成26年(58)　山梨県
2016年	平成28年	ミヤイリガイ		「気候変動と疾患構造の変化」 竹内勝之 『ライフサイエンスを巡る諸課題：科学技術に関する調査プロジェクト報告書』 国立国会図書館調査及び立法考査局
2017年	平成29年	ミヤイリガイ 鈴木稔先生と一緒に発見したものであるが、鈴木先生は"ミヤイリガイ"という名前がお気に召さなかったようで、感情的にしこりが残ったとされる。その後、鈴木先生は岡山理科大学教授に転出され、学生講義でも決して"ミヤイリガイ"と呼ばれず、"カタヤマガイ"という名称にこだわられたそうである。		「寄生虫屋が語るよもやま話・19火炎放射器で攻撃せよ！―ミヤイリガイの対策」 太田伸生　『臨床検査』61(8)　(2017年8月発行)
2018年	平成30年	ミヤイリガイ(カタヤマガイ)		「千葉県小櫃川流域における日本住血吸虫中間宿主ミヤイリガイの生息地の変遷」 二瓶直子ほか8名 『衛生動物』69(1)　日本衛生動物学会
2019年	平成31年	宮入貝		「日本住血吸虫卵を認めた直腸癌の1例」 佐伯泰愼他3名 『日本臨床外科学会雑誌』80(10)
2020年	令和2年	ミヤイリガイ(カタヤマガイ)絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN)		環境省レッドリスト2020 環境省2020年3月公表
2020年	令和2年		カタヤマガイ	『千葉県立中央博物館年報』 平成30年度(31) 千葉県立中央博物館
2021年	令和3年	ミヤイリガイ		「日本での第1回WHO協力センター連携会議(看護　2017年7月号　第69回　第8号)」『WHOプライマリヘルスケア看護開発協力センター30周年記念誌」 聖路加国際大学WHOコラボレーティングセンター運営委員会 (聖路加国際大学)
2022年	令和4年	ミヤイリガイ・宮入貝		『地方病を語り継ごう―流行終息宣言から25年―』 昭和町風土伝承館　杉浦醫院編　昭和町教育委員会
2022年	令和4年	ミヤイリガイ　別名カタヤマガイ		『中学生が伝える恐ろしいやまい・地方病』 菊池花音・杉山沙弥・中川開登 きのくに子どもの村学園南アルプス子どもの村中学校ゆきほたる荘
2023年	令和5年	ミヤイリガイ		「日本住血吸虫卵を認めた直腸癌の1例」 富原一貴・水内祐介他6名 『日本大腸肛門病学会雑誌』76(5)
2023年	令和5年	ミヤイリガイ(カタヤマガイ)		「身近な巻貝類も病原性吸虫類の中間宿主」 尾針由真 『タクサ：日本動物分類学会誌』54　日本動物分類学会
2024年	令和6年	ミヤイリガイ		「第93回日本感染症学会西日本地方学術集会　後研－20.回腸憩室穿孔の切除標本中に日本住血吸虫卵を認めた1例」 竹中翔太他4名 『感染症学雑誌』2024年98(2)

編　集　後　記

「本県では発見者の業績をたたえて『宮入貝』と名づけている」(山梨県 昭和43年)、「発見者の宮入教授を記念してこの小巻貝は『宮入貝』」と呼ばれるようになった」(塘普 昭和61年).「和名はカタヤマガイであるが、医学関係では発見者を顕彰してミヤイリガイと呼ばれる」(山梨県 平成15年)などと和名呼称についてはこれまで色々言われてきました。しかしながらいつだれが命名したのか、宮入自身は何と呼んだのかなど発見からすでに111年が経過し、今となっては不明確のままです。現在では文献資料からたどるしかないので、今回チャレンジしてみました。皆様方のご批判をいただければと思っております。

宮入慶之助記念館だより　第34号

発行者　特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
編集者　山口　明
〒388－8018　長野市篠ノ井西寺尾2322
Tel＆Fax　026(293)4028
HP：《宮入慶之助記念館》で検索
発行日　2024年8月1日